

# サラリーマンとして働きながら、保護司の活動に取り組む

東京都世田谷区

世田谷区保護司会北沢分区 保護司・小柳樹弘さん

働く世代、特に男性サラリーマンが地域活動への参加をためらうのには、地域での居場所や役割を見つけるのが難しいということが大きいだろう。しかし、誰しも少なからず好きなことや関心を寄せていることはあるはずだ。実際、学びや趣味が地域活動のきっかけになったという人は少なくない。東京・世田谷区に住む小柳樹弘さんもその一人である。仕事を通して「保護司」という存在を知り、現在では保護司としても活動する小柳さんに、保護司になったきっかけややりがいなどについてお話をうかがった。

## 地域活動に参加するためのポイント

- 忙しいから地域活動はできないと考えている人は、本当に時間がないのか、いま一度考えてみる。
- 少しでも関心のある地域活動があったら、とにかくやってみる。
- 必要なのは、一歩を踏み出す勇気。チャンスの女神は、あっと言う間に通り過ぎてしまう。
- 会社だけ、家族だけというのもつたいない。自分らしく生きることを大切にする。

## 勉強会で出会った言葉が、その後の生き方の指針になった

東京・世田谷区で家族と暮らす小柳樹弘さん。小柳さんは長年保険会社などに勤務してきた。中国・上海に赴任するなど、仕事はやりがいもあり、業務に邁進する日々だった。そんな小柳さんは、50代になり、今後の自分について考えるようになった。「定年というゴールが視界の先に見え始めたころから、今までいいのだろうかと考えるようになりました。定年後の足場はやはり地域ということになりましたが、これまで私が地域で関わったことといえば子どものPTAくらいでした。将来、定年退職後に地域に関わろうと思っても、いったい何をしたらよいのかわかりませんでした」と小柳さんは当時の気持ちを振り返る。

また、小柳さんには、以前からずっと心に引っかかっていることがあった。それは、仕事として参加していた異業種交流会の一環で、社会思想史の勉強会に加わったときのことだった。勉強会では、人の

道を分かりやすく説いた思想家・安岡正篤（1898～1983年）の著書を輪読した。「このときに出会った言葉がその後の私の生き方の指針になりました。それは、『一隅を照らす』という言葉です。解釈はいろいろあると思いますが、大きなことを論じるよりも、それぞれの人がまず自分の周りを照らしてみる。そうすれば、世界全体が明るくなる——。そんな意味だと思います」

この学びは、小柳さんの「自分らしく生きていくためには」「自分らしい生き方とはなにか」という問いへの答えを導き出すヒントとなった。

## 思い切って声をかけたことで、保護司への道がスタートした

2016年、小柳さんは、会社が行っている事業の関係で、NPO法人全国就労支援事業者機構の職員と関わりを持つことになった。全国就労支援事業者機構とは、経済界全体の協力により、犯罪者の就労支援などを行い、安全な社会づくりに貢献する組織である。協力雇用主として、犯罪・非行の前歴のた



会社に勤務しながら、保護司としても活動する小柳樹弘さん。勉強会で出会った「一隅を照らす」という言葉が、保護司の活動に結びついているという。

めに定職に就くことが容易でない刑務所出所者等を雇用する事業者や、会費の支払いなどにより就労支援に協力する事業者等で構成されている。小柳さんが所属する会社も会費の支払いなどを通じて活動を支援していた。

小柳さんは、この事業に携わるなかで保護司という存在を知った。

「刑法犯のうち再犯者が占める割合は5割弱ですが、出所後に仕事に就けない無職者の再犯率が高くなっています。つまり、犯罪や非行をした人たちが更生するには、いかに仕事に就き、いかに仕事を続けていくかが非常に大切になります。そこを支援するのが保護司なのです」

保護司は保護観察といわれる活動を行う。全国保護司連盟のホームページには、保護観察は「犯罪や非行をした人たちと定期的に面接を行い、更生を図るために約束事(遵守事項)を守るよう指導とともに、生活上の助言や就労の手助け等を行う」とある。これを小柳さん流に言えば、「保護観察の対象者が正しい道を歩めるように隣人として寄り添う」ということになる。

初め、小柳さんは、保護司について詳しく知るためにインターネットで検索してみたという。しかし、「詳細は最寄りの保護観察所へ」と書かれてお

り、具体的なことは分からずじまいだった。

そこである日、小柳さんの会社に来社した全国就労支援事業者機構の担当職員のTさんに「保護司という個人的なボランティアもありますよね」と思い切って声をかけてみた。するとTさんは、ポケットから身分証明書を取り出し、「実は、私も保護司なんですよ」とにっこりと笑った。小柳さんの保護司への道は、ここから本格的にスタートを切ることになった。

Tさんは、小柳さんの疑問に一つひとつ丁寧に答えてくれた。保護観察の対象者は軽犯罪者が多いこと、面談の場は保護司の自宅だけではなく、公共スペースを活用してもよいこと、活動を始めるにあたって専門的な知識はほとんど必要ないことなどについて、自らの経験も交えて話してくれた。

その後小柳さんは、Tさんの紹介で東京保護観察所に行き、さまざまな説明を受けた。保護司になるには面接があり、「社会的信望」「職務を遂行するための時間」「生活の安定」「健康」の4つを備えていることが条件となる。なお、保護司の活動はボランティアであるが、身分は非常勤の国家公務員である。2018年5月、小柳さんは法務大臣から保護司の委嘱を受け、世田谷保護司会に所属することとなつた。

## サラリーマンとしての経験を 保護司の仕事に活かす

小柳さんが保護観察の担当を持つことになったのは2019年秋だ。

面談は原則として毎月2回。初回は、相手の生活ぶりを見るために対象者の自宅を訪れたが、2回目からは地域の公共スペースなどで面談を行っている。面談では、対象者が仕事を継続しているか、悪い人とつき合っていないかなどを確認する。これらのことを見た上でそれとなく尋ねるのだが、特に人間関係が築けないうちはなかなか難しい。

「何の話をするか迷ったりもします。でも、私はサラリーマンですから、長い職業人生を通して就労の大変さ、そして尊さは実感しています。この辺りの話なら多少は説得力があるはずです。対象者が迷ったり困ったりしたときに、私たち保護司との話が何らかのヒントになったらいいですね」と小柳さんは話す。

保護司は、対象者にお金を貸したり、モノをあげたりすることはできないが、ともにハローワークや雇用先に行くことはある。時には警察に出向くこともある。小柳さんが対象者との関係で心がけているのは、対等な立場で向き合うことだ。「指導とか気の利いた助言をしようとか考えると、どうしても上か

ら目線になってしまいます。そうではなく、対象者と面談する際は、隣人として接するようにしています。対象者のために自分に何ができるかを考えます。しかし、できることはそれほどないのです。できることといえば、相手としっかり向き合うことしかないと悟りました。誰しも自分の人生は自分で切り拓いていくしかないのです」と小柳さんは言葉を噛み締めるように話してくれた。それは、活動のなかでさまざまな自問自答を繰り返しながら導き出したひとつの答えなのだろう。

## 地域活動の意義と楽しさを 多くの人に伝えたい

保護司の仕事は保護観察だけではない。そのひとつが「社会を明るくする運動」である。これは犯罪を未然に防ぐための広報や夜の街の見守り活動だ。小柳さんは「保護観察は犯罪が起きてからの活動ですが、こちらは犯罪を未然に防ぐ活動ですから、本来はこちらの方が大切かもしれません」と言う。

小柳さんが所属する世田谷区保護司会では、地域で開催されるボロ市に参加し、刑務所の受刑者がつくった製品の販売を行うのが恒例となっている。「ブルースティックと呼ばれる青い棒状の固形石鹼がよく売れますね」と小柳さん。また、羽根木公園の梅祭りへの参加、駅周辺でのティッシュペーパー



保護司会での自主勉強会の様子。経験豊富な先輩保護司からアドバイスや意見をもらいながら、保護司として成長していく。

配りなどを通した啓発活動にも取り組んでいる。さらに、区内の小学校や定時制高校を訪問し、道徳の授業時間などを活用して、生徒たちといじめや将来のビジョンについて話し合う活動もつづけているという。「保護司を志した当初は、このような地域活動に参加するとは思っていませんでした。でも、今は地域活動の意義と楽しさを多くの人に伝えたいと思います」

また、保護司の中には、民生委員や事業主、PTA、主婦、教師、区議など、さまざまな経験と経験を持っている人がおり、彼らは地域で多様な活動を行っている。「そうした人たちと交流を持つことで地域を知り、自分の幅が広がっていくことも楽しい」と小柳さんは言う。

### 保護司のたすきを、サラリーマンやそのOBにつなぎたい

「私は自分から進んで保護司を目指しましたが、これは少々珍しいケースのようです」と小柳さん。

民生委員・児童委員と同様に保護司も高齢化している。現役の保護司は、76歳の定年前に地域で適任者を見つけ、自分の後を託すのだという。小柳さんは、いずれは自分の保護司のたすきを、サラリーマンやそのOBにつなぎたいと考えている。保護司の活動は、一定の人生経験を積んだ40代以上の人々

向いていると考えているからだ。

平日に実施される保護司の集合研修は、年3回。小柳さんは有休休暇を取って参加している。保護観察の面談は、対象者と相談のうえ、休日の夜に設定した。

「忙しいから地域活動はできないという人がいますが、本当に時間がないのか、いま一度考えてみていただきたいと思います。そして、少しでも関心のある地域活動があったら、とにかくやってみてください。やってみて自分に向いていなければ、他の活動を探せばよいのです。例えば、保護司をやってみようと考えたら、門戸を叩けばどこでも歓迎してくれますし、活動する中でさまざまな学びや気づきがあるはずです。必要なのは、一歩を踏み出す勇気。チャンスの女神は、あっと言う間に通り過ぎてしまいます。1回だけの自分の人生。会社だけ、家族だけはもったいない。自分らしく生きたい。私はまだまだ修行中の身ですが、対象者が保護観察期間満了後に、隣人として私に声をかけてくれたなら、こんなうれしいことはないですね」

思い切って一歩を踏み出し、サラリーマンをしながら保護司としても活動する小柳さん。小柳さんはこれからも自分らしく生きることを大切にしながら、一隅を照らし続けることだろう。



駅前で実施している「社会を明るくする運動」。保護観察だけでなく、犯罪を未然に防ぐための活動も保護司の大切な仕事だ。



毎年多くの人出でにぎわう「せたがや ふるさと区民まつり」にもブースを出し、「社会を明るくする運動」を展開している。